Twelfth Night について

— 仮面と劇的構成 —

則藤　力

Twelfth Night はシェイクスピアが悲劇を書く前に、あるいは書き始めた頃に書かれた最後の喜劇で、最も円熟した作品と言われている。それはこの作品名が様々なモチーフと絡みつつ、それらが混然と溶け合って芝居の主題へと収斂していく構成になっているだけでなく、Orsino、Olivia、Viola 達のロマンスの主筋と、Sir Toby Belch、Sir Andrew Aguecheek、Maria 達を中心とした副筋というダブル・プロットの構造が、巧みに統合された一つの完全な世界を作り上げて人間社会の特質を際だたせているからであろう。

その特質の一つが芝居の題に示されているごとく「十二夜」である。無論「十二夜」とはクリスマスから数えて12日目、即ち1月6日であり、当時は盛大に祝われたらしい。例えば仮装したり晴れ着で着飾り仮面を付けて行列した後、ケーキを切り分けたその中に豆が入っているのを選んだ男女が豆の王様と王妃様になるという、日常の世界とは価値の逆転した世界が繰り広げられ、乾杯の後床を踏みならしたり、音を出すものを振り鳴らしたり、ダンスに興じたり、短い芝居が演じられたりした。中世に於いては12月25日以降「愚者の祭り」(Feast of Fools)として行われていたが、イギリスでは16世紀の改革で「十二夜」に移されたようである。

従って、Sir Toby 達のジッグ・ダンスを始めとする飲んだり騒いだりの乱痴気騒ぎが、当時の観客には十二日節の前夜のお祭り騒ぎと重なり合って見えたであろうことは想像に難くない。というよりもシェイクスピ

アの狙いはそこにあったと言えよう。そこで十二夜の饗宴の催しの特徴である<仮面・仮装>の、次いで「十二夜」の持つ意味と意匠という視点から、この作品の人物、構成及び主題について論じてゆくことにする。

I

第一幕第一場冒頭の青年貴族 Orsino の台詞は、ロミオのような血気にはやった若者のそれほどではないが、いわゆる<宮廷風恋愛>における恋の病の兆候を示している。

If music be the food of love, play on,
Give me excess of it, that, surfeiting,
The appetite may sicken, and so die.
That strain again, it had a dying fall:
O, it came o'er my ear like the sweet sound
That breathes upon a bank of violets,
Stealing and giving odour. Enough, no more;
'Tis not so sweet now as it was before.

(I. i. 1-8)

しかも「音楽が恋の糧であるなら、つづけてくれ。食傷するまで聞けば、さすがの恋も飽きが来て、その食欲も病み衰え、やがては消えるかもしれぬ」には、公爵の宮廷における日常の倦怠感が漂っているのみで、ロミオのように内なる生命に駆り立てられるといった焦燥感はない。自らもギリシャ神話のアクテオン(Actaeon)になぞらえていることからも明らかなように、恋を恋することで心の隙間を埋めたいという欲求がほの見えている。結局、彼の気まぐれの原因もそこにあり、「仕立屋に玉虫色の服を作らせるといい、あんたの心はいろいろ変化して見えるオパールみたいだから」

(第二幕第四場、74-5) とFesteに<愚者>扱いされるのも当然と言えよう。

言い換えれば、Orsinoは「恋を恋する者」という仮面を被っているが故に恋愛の本質を体現できず、O sprit of love, how quick and fresh art thou, / That, nothwithstanding thy capacity / Receiveth as the sea, nought enters there, / Of what validity and pitch soe'er, / But falls into abatement and low price, / Even in a minute! So full of shapes is fancy, / That it alone is high fantastical. (I. i. 9-15) と変幻自在の(fantastical)恋に身をやつさざるを得ない。であれば恋という陽炎を追うことに疲れたら、「花の褥にこの身を休める」(to sweet beds of flowers ibid., 40)だけでことは済む。それ故公爵という仮面の下で、男性としての自己の内なる存在に直面しようとしない彼の在りようが<愚者>であると、Festeに皮肉の矢を放たれたのである。

それというのも、公爵の恋の告白には幻想はあっても実体が伴っていないことは、Violaに彼の役割を演じ(to act my woes I. iv. 26)させていることにも現れており、それがOliviaの心を捉えるはずもないし、彼女もOrsinoの "mannerism" の虚しさを見抜いている。

> ***Viola.*** Alas, I took great pains to sudy it, and
> t'is poetical.
> ***Olivia.*** It is the more like to be feigned: I pray
> you keep it in.
>
> (I. v. 195-98)

他方、兄の喪に服することを盾にOrsinoの求婚を拒み続けているOliviaは、嘆いている理由をFesteに尋ねられ、兄が亡くなったからだと答える。ならば兄の魂は地獄にあるのかと問われると、天国に決まっていると返す。すかさずFesteは「兄上の魂が天国においでなら、嘆くのは愚かというもの」(The more fool, madonna, to mourn for your brother's soul, being in

heaven. I.v.68-9)と Olivia の<愚者>ぶりを笑いにくるんで暴露する。

こうして恋の幻想に苦しむ Orsino も、肉親の死を嘆き悲しむ Olivia も、仮面の下に巣くう自己の実態（愚者であること）を Feste に解き明かされる一方で、兄の死を悼み続けるはずの Olivia は、公爵の使いである Cesario という男性に変装した Viola に一目惚れしてしまう。この滑稽な豹変をもたらしたのは Viola の仮装の下の実態である。

実は Viola は船旅の途中難破し、船長に助けられイリリアという国にたどり着いたが、別れ別れになってしまった双子の兄 Sebastian は死んだものと思い、生きていくために男に変装してCesarioと名乗り、Orsino 公爵の小姓として仕えている。しかしながら男性の仮面の下の実体は女性である。生前父から聞いた覚えのある公爵に会い、今や娘に成長した Viola は公爵に思慕の情を抱くに至った。

「自分自身が公爵の妻になりたい」（第一幕第四場、42)と思っている Viola は、公爵の Olivia への求婚の使者として使わされるという運命の皮肉に遭遇する。男性の仮面を被っているが故の自己矛盾の苦しみを背負いつつ、公爵の代弁者を演じるが相手にしてもらえず、結局公爵の真意は彼の「胸の内」だと言わざるを得ない。そしてからかい気味に「あなたならどうする」と Olivia に問われて、つい Viola は公爵への恋情から恋する者の真情を吐露してしまう。公爵の “mannerism” の空しさに較べて、Viola(＝Cesario)の言葉のあまりの迫力に Olivia はうっとりしてしまい、兄の死を悲しむ気分を吹き飛ばされ、自分で自分が分からなくなる。(I do I know not what, and fear to find／Mine eye too great a flatterer for my mind. I. v. 312-13) そして公爵の求愛をにべもなく拒み続ける Olivia が、逆に Cesario(＝Viola) への想いを募らせ、身も世もあらぬほど恋の炎に身を焦がす。

A fiend like thee might bear my soul to hell.

(III. iv. 219)

この豹変ぶりと恋の愚行は *A Midsummer Night's Dream* の夜の森の恋人たちのそれを思い起こさせるが、ここは意識下の深層の森ではなく、イリリアの昼間の世界である。正しく「うわべをごまかす変装はなんという罪作り、悪魔のような悪人もこうして悪事を働く」(第二幕第二場、26-7)のだという Viola の台詞を裏書きしている。しかも Viola が男性だと思っている Olivia には、「本当の私は今の私とは違う」(第三幕第一場、143)という Viola の言葉の意味は無論解らない。見掛けと実体の食い違いは、シェイクスピア劇に常に現れるモチーフの一つであるが、まかり間違えば悲劇に発展する可能性を孕んでおり、実際後で瓜二つの兄 Sebastian が現れると人違いから険悪な場面が出来する。いずれにしても、とかく見掛けに騙され易い人間の＜愚者＞の局面は、Andrew と Viola の決闘や Sebastian を Viola と間違えての喧嘩の場面などに、繰り返し提示される構成になっている。

他方、Orsino や Olivia が、日常世界という仮面の下に逃げ込んで、無意識のうちに時の過ぎゆくままに流される＜愚かさ＞を Feste によって指摘されたのとは対照的に、Viola は仮面を被っていることを意識しているが故に、自己の内実と外観の落差に苦しまねばならない。Olivia が Cesario(＝Viola) への恋のメッセージとして託した、渡した覚えのない指輪を Malvolio に突き返されて、Viola は事態を即座に理解する。

> How will this fadge? My master loves her dearly,
> And I, poor monster, fond as much on him,
> And she, mistaken, seems to dote on me:
>
> (II. ii. 32-4)

しかし、*As You Like It* のロザリンドと同様、変装した Viola は目の前で相手が＜愚者＞を演じているのにどうすることもできないのである。つまり、男になっていても女であるが故に Olivia に対応できず、女であっ

ても男になっているが故にOrsinoへも自己の本心を伝えることはできない。従って、男性の仮面を被っているという制約が、実はViolaの試練となって自己発見への道に連なっていると言えよう。なぜなら、この両性具有性こそ、自己の実体に直面させ、自己の解放と抑制をもたらしているからである。

斯くしてロマンスの筋は三すくみの状態となり、ヘレナの様になりふり構わず恋人を追うのではなく、縺れた糸をほぐすには「時」に委ねる他はない。

O time, thou must untangle this, not I,

(ibid., 39)

II

こういった仮面を意識させ、<愚者>を露呈させる構成は、「十二夜」における愚者祭りの仮面行列を連想させるばかりではなく、人が普段意識することなく日常生活の中でも「自分」という仮面を被っていることをも露にする。中でもMalvolioの執事という仮面の下の<愚者>ぶりは、完膚無きまでに白日の下に晒される。

それというのもOliviaへの求婚の仲介を餌に、Sir Andrewから金を巻き上げようとする叔父のSir Tobyは、連日連夜、飲み食いの乱痴気騒ぎに明け暮れており、その最中、執事のMalvolioが「あなた方は気でも狂ったのですか？・・・ここは居酒屋ではありませんぞ」とこっぴどくたしなめる。彼の謹厳実直ぶりを、日頃からおもしろく思っていなかった彼らは、Mariaの発案でMalvolioを笑い者にして鬱憤を晴らそうとする。

「分別」(wit)、「行儀」(manners)、「体面」(honesty)を持ち、「場所、時間、身分」(respect of place, persons, time)を弁えて、いかにも見掛けはピューリタンらしく見えるMalvolioの仮面の下の実態を、実はMaria

は見透かしている。

> The devil a Puritan that he is, or any thing
> constantly, but a time-pleaser, an affectioned
> ass, that cons state without book, and utters it
> by great swarths: the best persuaded of himself,
> so crammed (as he thinks) with excellencies, that
> it is his grounds of faith that all that look on
> him love him:
>
> (II. iii. 146-52)

彼のこの鼻持ちならぬ「自惚れ」についてはまた、Festeの道化ぶりをMalvolioがけなした際、Oliviaも「それは自惚れ病というもの」(O, you are sick of self-love, I. v. 89)と診断を下す。その実態を露呈させる手だてとして、MariaはOliviaの筆跡をまねた偽の恋文をMalvolioに拾わせる。仕掛け通り、Oliviaの嫌いな黄色の靴下に十字の靴下留めをし、ニヤニヤ笑い顔を浮かべたMalvolioは気違い扱いされ、地下室に閉じこめられることになる。

「親族には敵意を、召使いには横柄さを、・・・服装には他と異なる装いを誇示すべし」という手紙の文を信じ込み、「ここに書いてあるとおりの人間になろう」(I will be point-device the very man. II. v. 163)と決意した後のMalvolioの言動は、「自惚れ」の醜悪さと滑稽極まりないことを見事に浮き彫りにする。しかつめらしい彼の謹厳な仮面の下の、伯爵に成り上がろうとの野心があるが為に、偽の手紙の内容を疑いもせず、突如傲慢で、尊大な態度をとるMalvolioは、まさに痴愚神の奴隷、<愚者>と言うしかない。エラスムスの言葉を籍りれば、「値打ちがなければないほど、自惚れが強く横柄で、いよいよ尊大で、いよいよ気取る」[1]訳である。

Malvolioと対照的な仮面を付けた＜愚者＞(fool)は Feste である。Viola によれば＜愚者＞の仮面を付けた＜賢者＞ということになる。

This fellow is wise enough to play the fool,
And to do that well, craves a kind of wit:
(III. i. 61-2)

実際、乱痴気騒ぎや「無法の横行」(uncivil rule II. iii. 122)が大手を振って歩くイリリアは愚者祭の精神に満ちた国、即ち、価値の逆転した世界の様相を呈しており、Festeの言葉だけが理性的な響きをもっている。恋の幻想にのめり込んでいる Orsino への、「気まぐれな人には船旅に出て欲しい・・・というのもそんな船旅からは何も得ることはないから」(第二幕第四場、75-9) という皮肉には、気まぐれな航海をしていては結局目的地には行き着かないと、婉曲的に Olivia への求婚の件を諭している。また、既に述べたように、Olivia の度を超した喪に服する行為に対しても、彼はからかいの内に常識を指し示すのである。或いはまた、地下室に閉じこめられた Malvolio に対しても、「そなたは無知の闇に迷っている」(第四幕二場、43-4) と彼の無明を諭す場面においても見ることができる。

Festeという道化(fool)そのものが価値の逆転を具現した存在であり、愚者の仮面を通して愚行を晒すと同時に賢者の知恵をもたらす機能を発揮するのは彼の当然の仕事である。しかしながら、価値の逆転したイリリアにその身を置いているところに作者の深い意図があると思われる。というのは、Sir Toby や Sir Andrew たちの愚行については Festeは殆ど批判の矢を放たない。それどころか Malvolio を笑いものにする彼らに荷担さえしている。

それを最も象徴的に示しているのが、地下室に閉じこめられたMalvolioをからかうために牧師と道化の二役を演じる場面であろう。例えば彼は Malvolio にピタゴラスの輪廻説をどう思うかと問う。キリスト教徒であ

るMalvolioは当然同意できない。するとFesteは「いつまでも闇にとどまるがよい。ピタゴラスの説を容認するまでは、そなたを正気と認めるわけにはいかぬ」(第四幕第二場、58-60) と言って去る。一見ノンセンスのように聞こえるが、Festeの言葉はしばしば彼の意図を跳び越えてしまう場合があるように思われる。キリスト教が伝えられる以前の古い時代の祖先たちは、<祖母がアホウドリに生まれ変わる>と信じていたことも可能である。一つことに取り憑かれることは<愚行>であることもあれば、<賢明>であることもある。そういった彼の曖昧性は、いわば<愚>と<賢>が紙一重、否、裏表であることをも示していると言ってよい。正しく縺れた糸を解きほぐすことになる双子の兄妹同様「一つの顔、一つの声、一つの服、二つの体、あるものとあらざるものを映し出す自然の鏡」(One face, one voice, one habit, and two persons! A natural perspective, that is, and is not! V. i. 214-15)となっている。

言い換えれば彼は知恵と愚行の境界に立って、迷妄の霧に彷徨う人々に罪と恩寵を映し出して見せるのである。これまでMalvolioの扱いが酷すぎるという批評がしばしばなされてきたが、これはあくまで喜劇であり、決して彼の謹厳実直さや真面目な生き方を否定するものでもない。彼の現す過度の「自惚れ」は、古代ギリシャ以来、人間の「傲慢」(hybris)を最も戒める "Know thyself" の思想に反する行いを顕現しているに過ぎない。

Sir TobyたちがFesteの批判を浴びないのは、彼らは<愚者>の仮面を被るまでもない愚者そのものであるからで、彼が矢を放つのはのは、<賢者>の仮面を被った<愚者>に対してである。そもそもFesteという名前自体ラテン語の "festum" (祝祭の意) から来ており、「十二夜」の愚者祭の首謀者であり、祭りの王であれば当然の姿勢と言ってよいであろう。

Ⅲ

こうしてみると、仮面を多分に意識させる構成は、「十二夜」に行われた仮面劇や仮装行列を連想させるのみならず、Malvolio の自惚れは偽の王が逆さまの世界に君臨する「愚者の祭り」を如実に写し出している。この祭日には日常とは逆さまの世界が展開され、身分の下の者が上の、上の者が下の身分と入れ替わる。即ち、その仮装の互換性がもたらす逆さまの世界もまた痴愚なのである。そのことは食い下がる公爵の使者 Cesario (＝Viola)に対して、「世も末だわ、身分の賤しい者がすぐ威張りだすとは」(第三幕第一場、129) と言うOliviaの台詞に象徴されている。実際、Maria たちの罠にかかった Malvolio は、I will be proud,..., I will baffle Sir Toby, I will wash off gross acquaintance (II. v. 161-63)と宣言し、＜愚者＞を演じて this is very midsummer madness (III. iv. 55)と Olivia に断じられることになる。

また、道化の Feste が Malvolio をからかうために牧師に扮したのも、＜逆さま世界＞が演じられる四月の「万愚祭」(All Fool's Day)のそれと通じており、Sir Toby や Sir Andrew たちの飲み騒ぐ愚かに振る舞う無法は、「十二夜」に行われたドンチャン騒ぎの無礼講とも重なる。そして Cesario と Sir Andrew の決闘騒ぎは「剣の舞」や「聖ジョージ劇」のパロディーともなっている。こうした＜愚者祭＞の価値の逆転した世界は混沌を現すと同時に、非日常の視点から日常性を見直すはたらきをもたらすのである。

Malvolio から見れば Sir Toby たちの愚者祭りの日常は、「無法の横行」そのものであり、逆に Sir Toby たちの視点から見れば、Malvolio の度の過ぎた生真面目さは悪徳にさえなってしまう。人間はとかく日常性の中に埋没し、その視野から出ようとしない。服喪にこだわる Olivia も、恋の幻想に浸り続ける Orsino も同様である。この日常性から抜け出せない人物たちに、視点を変えさせるはたらきをするのが＜賢＞と＜愚＞の狭間

に身を置く道化の Festeであるが、Viola も同様の作用を果たしている。

例えば第二幕第五場で Orsino は、どんな女でも自分ほど深くは愛せないと一方的な思い込みを口にするが、Viola は男こそ口先だけの誓いを並べるけれど、所詮それは心にもない見せかけだけだと反論する。そして、自分の恋心を表すことが出来ないために、父親の娘の話として語る。つまり、第三者の立場に身を置いて自分の胸の内を吐露し、それが公爵の心を動かすのである。従って、男と女の両世界に身を置くViolaと、賢と愚の境界から世界を複眼的視野で見るFesteとが「十二夜」の前夜祭の豆の王と女王の役割を果たし、ロマンスの主筋とSir Toby たちの乱痴気騒ぎの脇筋との、両極端の釣合を維持していると言えよう。

このような構成をたどるとき、芝居そのものが名前の通り「十二夜」の前夜祭と見事に重なっていることは明瞭である。そもそも「十二夜」の祭りは、キリスト教が伝わる以前のローマの農神祭に発した「十二月の無礼講」の名残をとどめており、一年の繁栄と豊穣を祈願するのが目的であった。従ってカトリック教会は認めたがらなかったが、あの "Midsummer Day" と同様、土着の習俗を教会の行事として吸収してゆかざるを得なかった。その結果、一月六日はキリストの誕生を知った東方の三博士がベツレヘムへ訪ねた日として、「顕現」もしくは「御公現」(Epiphany)の祝日とされ、そこに吸収されたらしい。

だとすれば、Malvolio ただ一人が嘲られ、地下室へ追放されたのは、古い習俗から引き継がれた贖罪の山羊の役割を果たしているのかもしれない。そして暗い冬の＜死＞の世界から、春の＜生＞の息吹の復活を願う素朴な心情を伴った農神祭的世界を透かし見ながら、混沌とした＜暗愚＞の世界にキリストの顕現による＜明識＞の世界がもたらされる。つまり奇跡である。

Sir Toby にけしかけられた Sir Andrew と Cesario(＝Viola)との決闘場面に船長が現れ、Viola の兄の Sebastian と勘違いし一悶着する。他方、Cesario に想いを寄せる Olivia は Sebastian と出会い、Cesario と勘違

いして二人は教会で式を挙げてしまう。そのことを知った公爵は怒り心頭に発するが、混乱の最中、兄の Sebastian が登場して二人が双子であることが判明し、縺れた糸が一挙に解かれることになる。

しかしながら、人間の社会の不完全な理性に、果たして<明識>はもたらされたのであろうか。もしそうであれば、或いは己の無明を悟れば、人間は自惚れを持つこともなく謙虚になれるはずである。なぜなら、賢しら顔に思う以上にこの世には不可視な力が作用している。そして、日常の些末な現実にもそれをあらしめる神の意志が働いていることを Feste は逆説的に示現しようとしたが、彼の境界的存在は、同心円的運動に縛られざるを得ないのかもしれない。「かくして因果は巡り巡って我が身にも」(And thus the whirligig of time brings in his revenges. V. i. 375) という Feste の言葉に、Malvolio から還ってくるのは、

I'll be reveng'd on the whole pack of you!

(V. i. 377)

という台詞である。

従って、この芝居を締めくくる Feste の歌は、冗談めかしているがどこか悲しみと憂いの調子がこもっている。なぜなら<晴(ハレ)>の後に待っているのは、<褻(ケ)>という現実、暗愚の世界なのであろうから。

A great while ago the world begun,
With hey, ho, the wind and the rain,
But that's all one, our play is done,
And we'll strive to please you every day.

(V. i. 404-407)

正にこの劇の名前 Twelfth Night : or, What You Will はそのことを暗示している。

（注１）「世界の名著　17」　エラスムス『痴愚神礼讃』　渡辺一夫・二宮敬　訳　118p　、（中央公論社　1969）

テクスト

Twelfth Night, (ed.) J.M. Lothian and T.W. Craik, (London : Methuen)

参考文献

Madleleine Cosman, *Medieval Holidays and Festivals,* (New York: Susan P. Urstadt Inc., 1981)

Irene G. Dash, *Women's World in Shakespeare's* Plays, (Newark : University of Delaware Press, 1997)

Walter Kaiser, *Praise of Folly* (Massachusetts; Harvard University Press, 1963)

Enid Welsford, *The Fool*, (London: Faber and Faber, 1935)

石井美樹子　『シェイクスピアのフォークロア』—祭りと民間信仰—（中公新書　1993）

植田重雄　『ヨーロッパの祭りと伝承』　（早稲田大学出版部　1987）